

厄除けの寺・四国霊場第二十三番札所薬王寺の調査と地域振興

－官学民連携「県南キャンパス事業」の紹介をかねて－

須藤 茂樹（四国大学文学部教授）

An Investigation of Temple 23 Yakuōji, a temple to ward off misfortune, and Regional Development - An Introduction to the joint Industry-Government-University "Southern Tokushima Prefecture Campus Project."
Professor, Faculty of Japanese Literature, Shikoku University
Shigeki SUDOU

Every year since 2012 students in our Japanese Cultural History class at the Department of Japanese Literature, Faculty of Literature at Shikoku University as part of Tokushima prefecture's "Regional areas are our campus" project have conducted cultural asset research in the Hiwasa district of Minami-town, Kaifu county, Tokushima prefecture.

Research has been conducted on a temple called Kōbōji known by the legend of Hōin (b.1777), materials related to local folklore stored in the Hiwasa library and archives in the town of Minami, as well as "Tannya-san" which prospered as a small cargo vessel wholesaler. However, the main focus of research is Yakuōji, the 23rd temple along the eighty-eight temple Shikoku pilgrimage route.

Old documents, religious texts, pieces of calligraphy and paintings belonging to this temple as well as objects considered to be stone cultural assets on the temple grounds such as path markers have been investigated by students in a class entitled, "Japanese Cultural History."

The results of this investigative research are announced every year through report meetings held in the area and published reports.

Among the students who have participated in this research there are some who have made this the subject of their undergraduate thesis.

As well, the wooden seated statue of Kōbō Daishi and seven patriarchs of Shingon Buddhism, as well as the *Kenponchakushokuhoshi* (colour painting on silk) mandala were designated as cultural assets of Minami town in 2015.

Between 2014 and 2016, an investigation on religious texts was conducted by students and interested members in the community as part of the "Temple Cultural Asset Investigative Report Staff Training Program Development" that is part of the Ministry of Education's Center of Community (COC) project.

In this paper, after giving an overview of these activities, I will describe the relationship between the Hachisuka family, ruler of the Tokushima domain, and Yakuōji, which we discovered through our research. Furthermore in regards to revitalizing the local area by utilizing these cultural assets, I will suggest a draft plan from the stance of eco-museum based exactly on the concept of a regular museum.

はじめに－本稿の課題－

近年、地方大学の役割は随分と変わった。従来は最新の教育が地方でも受けられるのが地方大学の大きな役割であったが、近年では「地域に貢献する大学」が目指す目標のひとつにあげられる。私が所属する大学でもCOC地（知）の拠点事業、COC+事業、そして大学研究ブランディング事業の補助金を活用して、矢継ぎ早に地域貢献事業に着手し、また地域の自治体、企業・団体などと連携協定を結び、積極的に地域に入って研究・教育に携わるようになった。

筆者は日本中一近世史、博物館学を専門としていることから、地域に眠る文化財・文化遺産を発掘し、地域の研究、教育、活性化に活用することを主眼として、地域の寺院・神社などの文化財調査を行い、地域の活性化につながる素材を提供している。現在、石井町所在の童学寺、蓮光寺の文化財調査、美馬市の千葉山安楽寺の調査をおこなっている。

本稿では第一部で美波町日和佐の薬王寺の調査の概要と調査成果の一部を報告し、第二部で「まるごと博物館」（エコミュージアム）の視点から文化財の活用についての提言の一事例を紹介したい。

第一部 古文書が語る厄除けの寺・日和佐薬王寺―蜂須賀家との関係を中心に―

一、四国八十八ヶ所霊場のもうひとつの側面

四国八十八ヶ所霊場、四国遍路については様々な研究がなされているが、四国遍路という信仰形態、すなわち宗教史や仏像・仏画など所蔵優品の検討、すなわち美術史といった分野からの研究が多くを占め (1)、個々の遍路寺院の歴史的、美術史的研究はあまりなされてこなかったといっても過言ではない (2)。近年、世界遺産認定を目指す動きの中で、四国各県の教育委員会を中心に、各寺院の悉皆調査がおこなわれるようになってきている (3)。

著者は、ここ数年、薬王寺今川泰伸ご住職のご理解とご許可を得て、四国八十八ヶ所霊場二十三番札所薬王寺の調査を本学学生・卒業生たちとともにおこなわせていただいている。本稿では、薬王寺の「厄除けの寺」の側面に注目し、あまり語られてこなかった徳島藩主蜂須賀家との関係について紹介することを主たる目的としたい。薬王寺は、四国八十八ヶ所霊場二十三番札所であるとともに、「厄除けの寺」として知られ、また県下人気初詣スポットでもあり、多くの参拝者で賑わっている (4)。薬王寺の「厄除けの寺」としての歴史や特質を明らかにすることは、薬王寺を理解するためには重要なテーマと考える。

二、本学学生による薬王寺の文化財調査

平成二十四年度から、徳島県・美波町・四国大学・徳島大学・徳島文理大学などが構成メンバーとなっている「地域がキャンパス」推進協議会（平成二十七年度から「県南づくりキャンパス事業」となり、県外大学が加えられ、対象地域も県南全域に及ぶ）が中心となって、徳島県海部郡美波町で進められている「「地域がキャンパス」推進事業」の一環として、四国大学文学部日本文学科・書道文化学科の二・三年生が履修できる「日中比較文化史演習（芸術）」受講生（平成二十七年度から「日本文化史演習」で日本文学科三年生が履修）が、薬王寺を中心に美波町日和佐地区の文化財調査を行っている (5)。参加者は十五から二十五名くらいである。また、平成二十六―二十九年は文科省COC事業「地（知）の拠点」の一環として、「寺院文化財調査報告スタッフ育成プログラムの開発」と題し、薬王寺所蔵の古文書・典籍の詳細な悉皆調査を行った。

授業での調査は、古文書、典籍、絵画、書跡、石造文化財など多岐にわたった。「絹本着色釈迦涅槃図」、「紙本着色十王図」、方丈・医王殿の佐藍川筆襖絵、貫名菰翁筆書額、湯浅桑月筆「月図」額、山岡鉄舟筆書額、板東無我筆「書貼交屏風」、慈雲筆書額、高井松齡筆「山水図屏風」、板東無我筆「大字書屏風」、「石造十王像」、「へんろ道道標」など多くの文化財を世に紹介することができた。特に大師堂安置の「木造弘法大師坐像並びに木造真言七祖像」と「絹本着色星曼荼羅」が、平成二十七年に美波町指定文化財に指定された。仁王門安置の仁王像（平成十三年十二月指定）と境内の大クス（平成十三年十月指定）しかなかった町指定文化財に新たに加えることができた。また、『薬王寺書画撰』をはじめ四冊の報告書が刊行され、さらに学生の発表や卒業論文が基礎となって史料紹介が公刊されている (6)。薬王寺あるいは日和佐を題材に卒論に取り組んだ学生も五人いる（内薬王寺を題材とした学生は三人） (7)。

三、「薬王寺文書」調査概要

徳島県海部郡美波町河内に所在する薬王寺は、四国八十八ヶ所霊場二十三番札所として、また厄除け祈願の寺として知られている。現在は高野山真言宗、医王山無量寿院と号し、本尊は薬師如来である。日和佐の町並みを見下ろす高台に位置し、展望台から見る風景はまさに絶景といえる。町から見上げる薬王寺の伽藍も美しく、そのどっしりとした姿は住む人びとに安心感を与えており、まさにまちのシンボルといえる。有名な信仰の寺院であり、観光地でもあるが、その歴史的解明と地域における位置づけはあまりなされてはいない。数度にわたる火災などにより、多くのご宝物が失われているのは事実であるが、なんといっても「薬

王寺さん」である、数多くのご宝物がいまなお残されていることは想像に難くなく、実際に仏画や典籍類が残されていた。また、少なからず古文書の存在を確認することができた。「薬王寺文書」は、徳島県教育委員会の委託を受け、鳴門教育大学の町田哲研究室が整理にあたったが、四国大学もまた授業の一環として調査を実施させていただいた。

その全貌は明らかにするまでには至っていないが、(1) 薬王寺の由緒がわかる史料、(2) 蜂須賀家との関係がわかる史料、(3) 末寺や末社に関する史料、(4) 薬王寺門前に関する史料、(5) 地域の歴史を知る手掛かりとなる史料、が確認できた。本稿では、(2) の蜂須賀家との関係がわかる史料のなかから、蜂須賀家と祈祷・祈願・厄除けを中心に史料の紹介と考察を行いたい。

四、蜂須賀家と薬王寺 ―厄除け祈願・誕生祝儀をめぐる―

(1) 縁起に見る蜂須賀家と薬王寺の関係

薬王寺は、厄除け祈願をはじめ蜂須賀家の崇敬が厚い寺院とされてきたが、根拠となる史料は、いままであまり明らかにされていなかった。史料を紹介しながら考察を加えてみたい。

まず、薬王寺の縁起にはどのように書かれているかをみていきたい。「蜂須賀主殿様江差上扣」とある蜂須賀家に提出されたと思われる「薬王寺来由記」によれば、蜂須賀家政が阿波国に入封すると、長宗我部氏の兵火により荒廃した伽藍修復や本尊供米領の寄進を行ったと記している。そして、家政が阿波国内を巡視した際に、薬王寺にも立ち寄り、阿波国守護細川氏の寄進状などを見て、「國中第一之伽藍無比類由緒等逐一御感心被為在、種々御弥歎之御詞御座候而、御祈願寺ニ被仰付」とあるように、「國中第一之伽藍」と認め、蜂須賀家の祈願寺としたとみえる。その後の記述のなかで、蜂須賀家との関連をあげれば、家政と宥英上人との関係、御札守りの毎月差し上げ、至鎮・敬台院の祈願、義伝様(至鎮)御石碑の由来、歴代の再建・修復、光隆二十五歳厄除代参、歴代の厄除代参、薬王寺住職登城の席次の問題などについて記述されている(8)。

(2) 蜂須賀家政発給の文書の検討

つぎに薬王寺と徳島藩主蜂須賀家との関係を厄除け祈願を中心に考察していきたい。

1 蜂須賀家政判物写(折紙)

當寺為堪忍分、以寺廻拾五石令附與訖、全可有所務之条、如件、

○茂成御判

慶長三年六月十二日

御名御判(朱書)

海部郡日和佐

薬王寺

2 蜂須賀家政判物写(折紙)

日和佐村之内水谷山一ヶ所薬王寺境内可為免除之条如件、

○茂成御判

慶長三年

六月十二日

御名御印(朱書)

1の「蜂須賀家政判物写」は、慶長三年(一五九八)六月十二日付で薬王寺堪忍分として、「寺廻十五石を寄付したものである。2は、日和佐村の内にある水谷山一ヶ所を薬王寺境内として免除する旨を伝えている。1と2は、同年月日付の家政の判物写であり、セットで出されたものと考えられる。1と2の写は他にも残されており、薬王寺にとって極めて重要な書類と認識されていたことが推測される。茂成は家政のことで、他にも家政と薬王寺の通交文書がある。

(3) 薬王寺宥深覚書の検討

3 薬王寺宥深覚書

(包紙ウハ書)

「太守様御厄御廿五

御祈祷御窺扣

薬王寺」

覚
太守様

来年者御二十五之御厄歳ニ御當被遊候、御先例茂御座候ニ付、御祈祷仕御札守指上申度奉存候、
御先代様御廿五之御厄御祈祷被為 仰附候、御先例茂御座候ニ付、當年御厄前之御儀ニ奉存候得者、
前廣
右之段書附を以奉窺候、已上、

薬王寺
宥深（花押）

寅二月十九日
楠本官八様
赤川三郎右衛門様
原 與右衛門様

4 薬王寺宥深判物

（包紙ウハ書）

「回章」

以廻状申入候、然者殿様御厄拂ニ付、御祈祷被 仰付候、昨年之通、當月晦日大般若、翌朔日大法修
行仕候、各處當月二十九日歟、亦者晦日早朔日ニ御来駕為仕〇候、右為御案内如是御座候、以上、

五月廿四日

薬王寺
宥深（花押）

打越寺（以下十ヶ寺略）

最寄

3 薬王寺宥深覚書は、徳島藩からの問い合わせに対して、先例に任せて来年の「太守様御二十五之御厄御
祈祷」に守札を進上したい旨、今年は前厄に当る旨を返答したものである。他の宥深覚書では、詳細は不明
だが三代藩主蜂須賀光隆の文書は残っているとある。同様の文面の判物が複数確認されていることから、藩
へ提出するために推敲を重ねたと思われる。

4 宥深判物は、殿様、すなわち徳島藩主の厄払の祈祷を命じられたことにより、大般若経勤行、大法修業
など厄払祈祷の内容と日程、出勤の案内を回状によって通達したものである。回覧を見た薬王寺の末寺の寺
院は合点を付けて次に回したものと思われ、最後は薬王寺に返り、同寺に残されたものと推測される。

（４）「薬王寺御札配り帳控」の検討

ここでは、便宜上「薬王寺御札配り帳控」と称す。嘉永四年（一八五一）に薬王寺が徳島藩主蜂須賀家と
城下の家臣、小松島（小松島市）や撫養（鳴門市）の寺院や有力商人等に御札を配った際の記録である（9）。

5 薬王寺御札配り帳控

（表題）

「御本城 正五九寒気御札上之事横切之控」

御本城（中略）

正五九寒気御札上横切之扣、嘉永四年五月御役所方御指圖ヲ以相改候扣、已後可用之、

覚
当月後祈祷例毎之通、御札守等奉指上候条、御添簡奉願上候、以上、

覚
一 木御札 壹枚

一 紙御礼 壺枚
御供物 壺箱
御洗米 壺包
御昆布 壺包
右者
太守様江

覚

一 木御礼 壺枚
一 紙御礼 壺枚
御供物 壺箱
御洗米 壺包
御昆布 壺包
右者
若殿様へ
右之通奉指上候、以上、

日和佐村

月 日 薬王寺

右之通之横切、前日ニ御役所江差出、御郡代之御添簡申請置、并御札臺二ツ・供物箱二ツ・御供物御両方分用意致シ置事、御札臺・供物箱ハ新シ町一丁目御檜物屋幸三良方ニ出来、御供物者、籠屋町山崎屋津音方ニ而調来ル事、御壺万分丸餅十二也、此も前日ニ加持シテ箱ニ入置事、御礼上之事ハ朔日・十五日・廿八日之御式日ニ差上ル也、但シ大都十五日ニ差上来ル、御奏者出勤日ハ近年二七四九ニ相成也、登城之事、朝六ツ時方五ツ半時頃迄之内宜シ、但シ御留主之年ハ、早キ方宜シ、小玄關方上リ、制札之御間ハ柳之御間ニ而相扣、添簡ヲ番頭ニ相渡シ候得共、番頭方御奏者江相渡ス、院主直参之時ハ、御奏者柳之御間迄受取ニ来ル、代傳之付ハ、御房主受取ニ来ル也、右都柳之御間ニ而差上テ宜シ、正五九寒氣共、賀島江御礼上ル事、三好杵原大札壺枚・御洗米壺包・御昆布壺包、已上三品也、御臺所口方上リ、詰番へ相渡ス事、御初尾ハ正月ニ而巳四勿差出候、

御家中年頭

徳島

本町左側

一 御札
扇子箱 蜂須賀駿河殿
青苔七

大玄關ニ而奏者衆へ相渡、

(下略)

藩主と若殿様に対する配り物とその際の作法が記されており、儀礼が重視された江戸時代の武家社会を知る上で興味深い。要点を記せば、事前に申し出て、郡代の添え状が要ること、その際、御札台二つ・供物の箱二つ用意すること、供物は前日に加持祈禱をすること、御札は一日、十五日、二十八日の式日に差し出すこと、最近は大抵十五日である、登城は六つ時から五つ半時までがよいが、藩主が在城ではないときは早目がよい、小玄關から上がり制札の間ハ柳の間で控えること、・添え状は番頭に渡し、番頭から御奏者に渡す、院主が直々に登城した際には御奏者が柳の間まで取りに来る、などである。「御家中年頭」として、徳島、寺島、住吉島、常三島、大岡、前川、出来島、富田、御弓町、幟町、大道、佐古、安宅、助任の家臣の名前と配り物が記されている。興味深いのは屋敷の場所が詳細に記され、家紋が書かれている。蜂須賀駿河や稲田九郎兵衛など重臣層の名が並ぶ。次に「小松島年頭」として、地藏寺などの寺院、寺沢六右衛門や島野屋茂右衛門らの豪商、ついで「撫養年頭」として真福寺などの寺院、近藤利兵衛ら豪商の名前と配り物が記されている。それぞれの末尾には、小松島、撫養での配り物の総数が記されている。

(5) 嫡男誕生祝儀

つぎに、徳島藩主蜂須賀家の男子誕生に関する薬王寺とのやりとりについてみてみたい。

6 蜂須賀飛驒守書状写

(包紙)

「綱通様御誕生御悦申上ル御返翰写 御本書泉福寺有り」

為徳慶速水惣左衛門かた迄飛札并扇子到来幾久令納受候、如芳意阿州御内御平産、殊男子誕生我等大悦不過之候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

蜂飛驒守

三月廿五日 名乗書判

薬王寺

泉福寺

7 長谷川主計頭書状写

千松様御誕生為御悦以飛札御祈禱之御札并扇子一箱致披露候之處、御満足思食候、此旨我々方々相談得可申入旨御意候、恐々謹言、

長谷川主計

三月廿七日 名乗書判

薬王寺

泉福寺

6の蜂須賀飛驒守書状写は、包紙の記述から、「綱通様御誕生」に関わる史料である。7の長谷川主計頭書状写は、「千松様御誕生」に関するもので、千松丸は蜂須賀家嫡男に付けられる幼名であることから、綱通のことと推定される。「千松様御誕生」に対して薬王寺から贈られた「御祈禱之御札并扇子一箱」を藩主に披露したところ、藩主が大いに満足した旨が伝えられている。6と7はセットとなり得る史料と考える。

以上見てきたように、厄除けの寺として、徳島藩主蜂須賀家の除厄を行うとともに、誕生祈禱、年頭祈禱なども行っていることがわかった。

五、蜂須賀家と薬王寺再興一棟札の紹介を中心にー

薬王寺は数度の火災にあっており、特に明治三十一年（一八九八）の大火により多くの伽藍を失っている。その後の復興により、現在の立派な伽藍を見るに至っている。江戸時代の建造物としては、大師堂と地藏堂のみが残されている。しかし、「薬王寺文書」のなかには、新しい表紙が付けられ、「歴代棟札写」と表題を記した冊物が一冊残されている。冒頭部分を翻刻すると以下の通りである。

8 本堂棟札写

本堂

表 奉再造立五間四間薬師堂 一字

大檀那阿淡両脇太守源朝臣従四位光隆公

裏 干時寛文三癸卯曆正月十二日 大工 弥次左衛門

細工 高野善兵衛

願主法印権大僧都宥秀 惣肝煎 濱幾右衛門

同五郎右衛門

(下略)

本史料は、薬師堂（本堂）の棟札銘文の写で、寛文三年（一六六三）正月十二日建立、大檀那は徳島藩三代藩主蜂須賀光隆であることがわかる。現在の薬師堂（本堂）は、明治三十一年（一八九八）の大火により焼失、明治三十六年（一九〇三）に再建されている。本堂棟札写には、ほかにも多くの棟札銘文三十程が収載されている。しかし、虫損が多く解読は極めて困難である。この点は今後の課題としたい。

以上、厄除け、誕生、年頭などの祈禱・祈願を中心に蜂須賀家と薬王寺の関係について、史料に基づき紹介したが、調査は端緒にすぎたばかりである。今後は学生たちと調査を進め、目録の作成・刊行、主要史料

の紹介を行い、広く多くの方々の利用に供する環境を整えていきたい。札所寺院の実態を明らかにすることは、四国遍路研究の進展、さらには徳島を含む四国の地域史を明らかにすることになると考える。

第二部 文化財でまちを元気に一まると博物館という考え方

人生八十年時代、生涯学習という言葉が定着した現在、博物館の役割が多様化し、その役割への期待が増大している。

近年では、博物館を核にすることにより、地域の経済を活性化させることができるという視点から、塚原正彦が『増補改訂版 ミュージアム集客・経営戦略』などの研究成果が発表されている(9)。

塚原氏は、英国の博物館に学び、ミュージアム産業の可能性を指摘し、ミュージアムは地域経済の救世主になると断言する。知と夢を売る施設であり、「ものを見せる場」から「学習の場へ」と方向性を示し、エコミュージアムなどの視点からミュージアムの可能性について論じている。日本のミュージアム産業の事例として、夕日のミュージアムや美山町かやぶきの里をあげている。「ものを見せる」から「学習の場へ」、何度も行ってみたくなる演出、利用者に満足度を付与する、博物館を活用するミュージアム・マネジメントなどについて解説している。

博物館に身を置いたことのある私も博物館の持つ「チカラ」や可能性を信じたいし、塚原氏の見解に魅力を感じ、また目指す方向のひとつとして考慮する必要があると感じる。しかし、日本の博物館の発展過程を考えると、博物館で経済を活性化させるのは現状では困難であるし、教育機関と位置付ける日本における博物館の使命を考えると、経済面にのみに傾斜する発想には危惧を覚えるところである。やはり、博物館は教育的機能をこそ第一義に考えていかなければならないと思っている。その先に、結果的に地域が活性化し、経済的に潤うのであれば、それに越したことはないと思う。

ここではいわゆる従来の博物館とは違うエコミュージアムの視点に立ち、長野県松本市をはじめ近年諸所で設立、あるいは検討されている「まると博物館」について日和佐を事例にその可能性を検討し、試論として提言をしてみたいと思う。

二、博物館とは何か

博物館に関しては、さまざまな概説書にその定義について記載されているので、詳細はそれらに譲りたいが、「博物館法」(昭和26年[1951]12月施行)では、第二条「博物館は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む、以下同じ。)し、展示し、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(社会教育法による公民館及び図書館法による図書館(昭和二十五年法律)を除くのうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人(独立行政法人)(独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三号)第二条第一項に規定する独立行政法人をいう。第二十九条に同じ)。を除く。))が設置するもので次章の規定による登録を受けたもの。」である。また博物館は事業を行うに当たって土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない、としている(第三条2)。

博物館関係者の間では、従来も同様の視点で論じられてきたが、博物館に二十年以上勤務し、いままた大学で博物館学を講じている筆者にとっては、博物館の機能について次のように考えている。資料集収・保存、調査研究、展示公開、教育普及の博物館の機能を基礎として、博物館には、経済的豊かさには直結しないかもしれないが、①教養を豊かにする、②こころを豊かにする、そして③博物館には癒し効果がある、と考えている。博物館は「もの」、いわゆる資料を根幹として、学芸員等博物館職員という「ひと」が来館者である市民・観光客といった「ひと」に展示やレファレンスを通じてアクションする機関であるが、ひとびとがさまざまなことを学び、感動する、さらには活動する「場」でもある。さらに、「癒し」を得る場でもあると考えている。

大堀哲は、「1回の利用者を生涯にわたってのミュージアムのファンにするためにはどうすべきか」といった利用者満足のためにミュージアムを経営するということは、ほとんど想定されてこなかった」(「序にかえて」塚原正彦『増補改訂版 ミュージアム集客・経営戦略』所収)とする。たしかに、数十年前の博物館のなかには、そのような傾向の館が存在したと思うが、近年では如何に入館者を増やすか、リピーターを獲

得するかを真剣に模索している博物館も少なくないを考える。

三、地域博物館の使命

(1) 「地域」とは

まず、「地域」という言葉である。実はこのことばの捉え方は難しい。行政単位としての「地域」を思い浮かべると思うが、生活圏としての「地域」もあるし、目的や使命、住む人々の考え方によっても様々である。今回は美波町の旧日和佐町を対象として考えてみる。

(2) 地域博物館の使命

つぎに、地域博物館の使命とはなにかを考える。地域に関わる博物館資料を収集、保管し、保存を考慮しつつ、調査研究を進め、展示公開や講演・解説・イベントといった教育普及活動を通じて、町民や観光客など内外の多くの方々に地域の歴史・文化・自然などを知ってもらうことを使命とする。そして、まちの魅力を発信していくのである。

では、博物館施設がないとこの発信はできないのか。そのようなことは断じてない。そこで、エコミュージアム、まるごと博物館という考え方を紹介してみたい。

四、エコミュージアムの思想

エコミュージアムの発祥はフランスで、フランス語の「エコミュゼ」を英訳したものが「エコミュージアム」である。エコミュージアム(Ecomuseum)は、エコロジー(生態学)とミュージアム(博物館)をつなぎ合わせた造語で、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で継承されてきた自然や歴史、文化、生活様式を含めた環境を、総体として持続的手法をもって永続的に研究・保存・展示公開・活用を図っていくという考え方であり、その実践そのものでもある。エコミュージアムは、展示資料の現地保存し、住民が参加して主体的に運営に参加するもので、地域を見つめ直し、その発展を目指すことに大きな特徴がある。エコミュージアムは、必ずしも博物館として明確な形態があるわけではなく、さまざまなタイプのものが存在する、あるいは存在してもよいのである。

日本ではいまだ耳慣れない用語であるが、エコミュージアムの歴史は意外と古い。1960年代後半に、国際博物館会議(ICOM)の初代ディレクターであったG・H・リヴィエールがその概念を提唱し、尽力したもので、「エコミュージアム」の英語訳はユグ・ド・ヴァリーニが考案したものである。そして、1871年の第9回国際博物館会議の席上で公に発表され、その後世界に紹介されて各地でその地域に応じた展開を見せている。

日本では、1980年代になって、エコミュージアムの思想が積極的に導入されるようになった。日本にエコミュージアムを紹介した新井重三は、エコミュージアムについて、「地域社会の人々の生活と、その自然環境・社会環境の発過程を史的に研究し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することつうじて、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする新しい理念を持った博物館である」と定義している。

エコミュージアムには様々な「かたち」があるのは前述の通りであるが、日本では次のような「かたち」が一般的なパターン、モデルとなっている。エコミュージアムの構成要素は、地域の概要を紹介する拠点施設となる「コア」、それぞれの現地で保存されている展示対象となる「サテライト」、コアとサテライト、あるいはサテライト相互をつなぎ、地域の魅力再発見へと導く「ディスカバリー・トレイル」(発見の小径)などからなる。これらでつなぎ、構成される地域全体が資源となる。高価な美術品を対象とするのではなく、ありきたりのもの、地域そのもの、このなかには、いまは残っていない記憶として残る文化遺産も入る、これらをいわゆる博物館施設に移すのではなくその地で保管し、専門職としての学芸員ではなく、地域で生活する住民ひとりひとりが学芸員となって、それぞれのサテライトをつなぎ、地域にやってくる人々をともに迎え、解説し、サービスを施すものである。主体があくまでも地域であり、そこにくらす地域住民である、という点が最大の特徴である。

その地域の住民たちが、いまある現在を過去どのような経過を経て形成されてきたのかを調べ学び、理解し、それを他の地域の人々に公開し、理解を得る、そして未来に正しく受け継いでいく、ここに意義がある

のである。こうした一連の取り組みが結果、地域の活性化、地域振興、地域経済の発展に貢献できることもまたエコミュージアムの目的のひとつでもある。

日本ではすぐに「地域活性の化切り札となる」として、エコミュージアム、まるごと博物館が注目されがちであるが、実際の成功例は必ずしも多いとは言えない。すぐに人が来る、とか、お金が儲かる、とかに通じるものではない。現状のグローバル経済、利潤追求、資金獲得などなど多くの困難な状況が伴うのである。

しかし、それでもエコミュージアムの理念をしっかりと理解し、従来の日本における博物館の発展過程を認識し、わが国で育まれた「博物館学」を上手に援用しながら、日本に即応した日本型のエコミュージアム、まるごと博物館を模索していけば、それなりの成果があがるのではないかと私は考えている。そのためには従来の博物館や学芸員の思考を変えたとともに、まるごと博物館の核となる地域の住民（市民学芸員）の意識、それをサポートする役所の考え方も変えていかなければならないと考える。また、地域によっては、エコミュージアムが展示業者主導によって計画立案、推進がなされているところも少なくなく、設立後、あるいはその過程において、必ずしも円滑にいていないところもあるようだ。意識改革が必要ではないかと考えるところである。それができれば、必ず新たな「かたち」の博物館としての「まるごと博物館」が出来上がり、また地域活性化の起爆剤となる可能性を十分に秘めていると考える。

五、美波町へのひとつの提言―日和佐まるごと博物館構想・博物館の可能性―

文化財というと、すぐに「国宝」や「重要文化財」、「天然記念物」などという言葉を想起することだろう。狭義の意味ではその通りであるが、ひろく人間や自然がつくりだした後世に残しておきたい価値ある文物としておこう。

薬王寺、うみがめなどすでに知られた魅力的な文化財が数多くある。しかし、まだ隠れた文化財はたくさん眠っているはずである。住民の手で発見することが大切である。

学生たちとともにおこなってきた四年間の調査活動の成果を踏まえ、また日本におけるエコミュージアム、まるごと博物館の動向を鑑みて、試みに「日和佐まるごと博物館」構想を提示してみたい（図）。あくまで、参考程度とお考えいただければと思う。「地域に生きることの意義」を見つめ直し、改めて自分たちが住んでいる土地に刻まれた歴史や文化に向かい合ってみてはどうだろう。

おわりに―文化財・文化遺産を活かしたまちづくりはできるのか―

まちづくり、まちおこし。簡単に言うが、なかなか難しい。

本稿では、大学による文化財調査の具体的事例を、薬王寺調査を中心に紹介し、その上でそのような成果をどのようにまちづくりに活かせばよいかを考えてみた。寺院は地域を考える「核」のひとつになり得るものと主張する。

今後も寺院の文化財調査を通じて地域の文化遺産を掘り起こし、地域の活性化、まちづくりに貢献していきたい。また、文化財の調査を通じて、地域に愛着を持ち地域の発展に貢献できる人材づくりにあたっていきたいと考えている。

〔註〕

- (1) 浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究―四国遍路の接待文化―』（古今書院 二〇〇八年三月）、星野英紀・浅川泰宏『四国遍路―さまざまな巡礼の世界―』（吉川弘文館 二〇一一年三月）、真鍋俊照『四国遍路を考える』（日本放送協会 二〇一〇年三月）、武田和昭『四国へんろの歴史 四国辺路から四国遍路へ』（美巧社 二〇一六年一月）、柴谷宗叔『四国遍路 こころの旅路』（慶友社 二〇一七年四月）、辰濃和男氏『四国遍路』（岩波書店 二〇〇一年四月）、森正人『四国遍路―八十八ヶ所巡礼の歴史と文化―』（中央公論新社 二〇一四年一二月）等。
- (2) 町田哲は「五番札所地蔵寺と四国遍路―札所寺院の文化財基礎調査から見たこと―」（鳴門教育大学戦略的研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成』 鳴門教育大学 二〇一〇年）で、「従来四国遍路研究では、個々の霊場寺院の歴史的検討がそれほど進んでいなかったため、課題が多く残されていた」と述べている。
- (3) 近年の徳島県の研究成は『「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書 3 舎心山常住院太龍寺 「四国八十八箇所霊場第21番札所」』（徳島県・徳島県教育委員会 二〇一三年）など、ほかに町田哲前掲註(1)論文、町田哲「五番札所地蔵寺と四国遍路―札所寺院五番札所地蔵寺を事例として―」（徳島県立博物館編『空海の足音 四国へんろ展〔徳島編〕』四国へんろ展徳島実行委員会 二〇一四年）、松永友和「四国遍路札所寺院の本末論争関係資料について―雲

- 辺寺所蔵文書の紹介と翻刻一」（『徳島県立博物館研究報告』第二六集 徳島県立博物館 二〇一六年三月）、同「四国遍路札所寺院と徳島藩・江戸幕府一元禄期の本末論争を通して一」（『四国遍路と世界の巡礼』第二号 愛媛大学附属四国遍路・世界の巡礼研究センター 二〇一七年三月）等がある。四国霊場開創一二〇〇年を記念して四国四県で開催された「空海の足音 四国へんろ展」における資料調査の進展も評価できる。
- (4) 日和佐町史編纂委員会編『日和佐町史』（日和佐町 一九八四年三月）、平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 37 徳島県の地名』（平凡社 二〇〇〇年二月）等。
- (5) いままでの調査の概要は、平成 24 年度薬王寺、平成 25 年度薬王寺、平成 26 年度薬王寺・弘法寺（法印さん）、平成 27 年度薬王寺・美波町立日和佐図書館・資料館、平成 28 年度谷屋、平成 29 年度薬王寺である。
- (6) 須藤茂樹監修『平成二四年度「地域がキャンパス」推進事業 薬王寺文化財調査報告書 ふるさと再発見—薬王寺の書画撰—』（「地域がキャンパス」推進協議会 二〇一三年三月）、須藤茂樹監修『平成 26 年度「地域がキャンパス」推進事業 薬王寺文化財調査報告書 —薬王寺境内案内—石造文化財の魅力—』（「地域がキャンパス」推進協議会 二〇一五年三月）、笠井藍水著『薬王寺誌』（地域がキャンパス推進協議会 二〇一六年三月）、須藤茂樹・受講生「古文書から見た薬王寺の諸相二 明治時代の薬王寺—「薬王寺概要」の紹介—」（『言語文化』12 号 四国大学附属言語文化研究所 二〇一四年一二月）、漆原晴香『薬王寺所蔵書籍の研究—板東無我の書と貼り交ぜ屏風の解説を中心に—』（四国大学 2016 年 3 月）。他。
- (7) 薬王寺の由来書、薬王寺所蔵の書作品、資料館所蔵の木偶頭と赤松地区の人形浄瑠璃芝居、谷屋文書と流通。
- (8) 須藤茂樹・磯崎進之介・名倉稔・南條賢志「史料紹介 「薬王寺来由記」」（『四国大学研究紀要 人文社会科学編』第四七号 四国大学 二〇一六年一二月）。
- (9) 須藤茂樹・林愛華・細川葵「古文書から見た薬王寺の諸相—御札を配る「薬王寺御札配り帳控」の紹介—」（『四国大学研究紀要 人文・社会科学編』43 号 四国大学 2014 年）。
- (10) 塚原正彦 デビット・アンダーソン著 土井利彦訳『ミュージアム富国論 英国に学ぶ「知」の産業革命』（日本地域社会研究所）、塚原正彦『ミュージアム集客・経営戦略』（コミュニティ・ブックス 日本地域社会研究所 二〇〇四年一月）。

図 1 まるごと博物館 日和佐 模式図（須藤作成）

